

私が行きたい未来

青森県青森市立古川中学校

三年 鳴海碧空

「これから私の描いた絵をいろんな人にみてもらいたい」

これは小学校を卒業する時に、私が卒業制作の色紙に書いた夢である。

幼稚園の頃から絵を描くことが好きだった私は、暇さえあれば何かしら描いていた記憶があり、小学校に入学してからもそれは変わらなかった。

初めて自分の絵が表彰された時に、今まで感じたことのない気持ちになった。それまで得意と言えるものが特に無く、自分に自信も無かった私だけ自信けれど、初めて誰かに認められたことで少しだけ自信になったのだ。そして表彰されたことを両親と祖母がすごく喜んでくれたのが何よりも嬉しかった。その時から、もっと絵がうまくなりたいという気持ちを持ち始めた。うまくなれば、またみんなの喜ぶ顔が見られると思ったのだ。

小学六年生の時に、デパートの大きな広場に自分の絵が飾られ、その場所で表彰されることになった。人前に立つのが恥ずかしくて緊張したけれど、沢山の人が私の絵の前で足を止めてくれるのを実際に見た時、本当に嬉しくてドキドキした。自分の描いた絵をいろいろな人に見てもらいたいと、強く思った

のはその時だった。

中学に入ってからその気持ちは変わらず、絵を描き続けていた。絵を描く時間は、自分にとってとても大事な時間だった。その時の自分の感情を絵で表現できるからだ。幸せな気分の時は、絵を描くことでもっと楽しくなれ、悲しい気持ちは絵を描くことで無心になれるのだ。そうしていくうちに、絵を描くことが自分の特技となり、自分の居場所になった。もっと上手に表現できるようにになりたい、誰かに認められたいという気持ちの根本には、家族や周りの人たちの笑顔が見たいという思いが常にあったのだと思う。そしてそのために自分に出来ることは何かと考えた時に、専門的に絵を学びたいと思いはじめ、進路のことも真剣に考え始めたのだ。

青森県内にも、美術を専門的に学ぶ時間を設けている高校があり、体験入学も全て参加して、それぞれの学校の雰囲気、指導の仕方を実際に感じる事ができた。まだ一校に絞れていないものの、美術を学びたいという思いは揺るぎなく、それを学んだ上で自分が将来どんな仕事に就きたいのか、その先のことを考えるようになった。

ところがある時、美術の世界で活躍できる人はほんのひと握りだと知った。しかもそれを志願する人たちは少なくないのが現実だ。実際に高文連で展示されている作品を見に行き、周りのレベルの高さも知った。私はその中で自分の道を見つけていけるのかと不安な気持ちになってしまった。絵は趣味のままで終わるべきなのかとも思った。

そんなふうには、美術の道への不安を感じていた時、ポスターとプログラムの表紙を描かせてもらった吹奏楽部の定期演奏会があった。自分が描いたポスターをコンビニ等のお店で目にし、多くの人がプログラムを手にしているのを見た時に、自分が少しで

も吹奏楽部の役に立てたのかもしれないと感じたのだ。そして誰かを感動させたり、誰かの心に残る作品をもっと創ったりしたいと強く思った。と同時にそれを仕事にしていくことは責任をもって仕上げることだと身に染みて感じた。時には自分の方向性と違う物を求められることもあるかもしれない。全てが自分の思い通りになる世界ではないかもしれない。大変ではあるけれど、誰にでもできるわけではないやりのある仕事ならば、それに挑戦してみたいと思えたのだ。

今現在の私に出来ることは、様々なコンクールに一つでも多く作品を応募していくことだと思ってる。そこでいろいろな人の作品を見ることで自分に足りない部分、未熟なところを知ることから何かを得たい。

高校へ進学したら、基礎から専門的なことまで深く学び、将来はグラフィックデザイナーを目指したい。きつとこの先また悩み、苦しむことがあるかもしれない。その時は、今感じているこの気持ちと、小学生の自分が願った小さな夢を思い出し、自分を奮い立たせながら、前へと進んで行きたい。自分の能力が認められ、一つでも多く作品を世に残すことで、人のため、自分のためになるのが、この仕事の楽しいところだと思う。そしていつか誰かの心を動かせる物を創ることが目標だ。

社会にとって絵とは、感動や驚き、喜びや悲しみで人の心を揺さぶるものだと思う。自分にとって絵とは、自らを表現できる一番の手段であり、私の人生そのものである。